
宇宙人セイヨーク

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙人セイヨーク

【Nコード】

N3079I

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

彼の名はセイヨーク。宇宙人だ。地球来星の目的は子孫繁栄と地球侵略。この二つだ。果たして彼は目的を達成出来るのだろうか！？

第1日目 地球到着

一つの宇宙船が日本の山地に着陸した。

宇宙船から出て来た黒一色の宇宙人は目標を天高く叫んだ。

「俺はセイヨーク！俺の目的は子孫繁栄と地球制服だー！」

そうすると、辺りの茂みがざわついた。

「不振人物！手を挙げろ！」

黒一色の宇宙人をたまたま、夜間訓練していた陸軍隊員達が捕まえたのだ。

・
・
・

所変わって、軍の施設。その中の一部屋で尋問が行われていた。

「残念だったな宇宙人！？宇宙人はどこへいった？」

捕まえたばかりの宇宙人に一瞬の間に逃げられ騒然となる軍人達。

・
・

「危なかったー。まさか、いきなり捕まるとは……」 軍施設の屋根に先程の軍人とうりふたつに変身した宇宙人が立っていた。

「さて、町に行こう……」

そう言うと宇宙人は煙となって空へと飛び去っていった。

$\{u, u', u''\}$

第二日目 アルバイト

ここは、セイヨーク（宇宙人）がバイトする料理店。皿洗いに従事するセイヨーク（宇宙人）。

「君が洗ったお皿はピカピカで気持ちが良いよ」

料理長に褒められはにかむセイヨークは――

「洗うのが大好きです!!」

「あれ!？このお皿とか、絵柄が無かったかね？」

「スイマセン。汚れかと思っちゃって」

「どんだけー!」

「お客様へのサービスを忘れないようにね！」
次は、レジ店員の業務に就いたセイヨーク。業務を坦々とこなした。

「な、なんでレジが空なの!？」

レジのチーフに詰め寄られるセイヨーク。

「サービス最優先しました!」

「しすぎだー!!」

・
・
今度は郵便のアルバイトを済ましたセイヨークは郵便局に帰って来た。

郵便局の偉いてさんがセイヨークに近寄って来て質問した。

「手紙が届いてないって苦情が来てるんだけど？」

「すみません。食うに困って……」

事情を聞いた郵便局の偉いてさんは――

「なんだ理由があるなら、ちゃんと……」

セイヨークは理由を述べた。

「……食べてしまいました」

「手紙をかー！ー！！」

・
・
・

「結局ダメだったか。あーあー」

自室（取り返した宇宙船の中の）のベッドで眠りにつくセイヨーク（宇宙人）なのであった。

{つづく}

第三日目 猫

ここは、通学路。セイヨーク（宇宙人）は強敵と対峙していた。
「にゃー」

人懐っこい白猫は、セイヨーク（見た目はいかつい男）に擦り寄って来た。

「ヒエーー！」

明らかに怖じるセイヨークに通学中の女子高生は――
「プッ。あの、おっさん猫にビビってるよ」

「ダサー」

好き放題言われながらも、母星の時を思いだしていた。

「これが母星を苦しめた危険性物『猫』！」
セイヨークの母星では、猫は毒の霧を噴射したりと猛威を振るったことがある。

「こういう時は、『言語変換装置』だ！向こうの要求を聞かなければ大惨事になってしまう！」

一人騒ぐセイヨークを不振な目で見る通行人。

『言語変換装置』（黒い小さい玉）を猫語に合わせてから食べるセイヨーク。

『猫さまの、要求はなんですか？』

緊張しながらも尋ねるセイヨーク。

『じゃあ、人に首輪を着けて散歩してみたい！』
と白猫様。

・
「見てあれ！何かの撮影かしら？」

「変態に決まっているざまーす」

「おっさん。頭大丈夫か？」

セイヨークは、大災害を未然に防ぐため自分を犠牲にしたのだ。

「にゃ、にゃー……」

痛々しくもセイヨークは自身に首輪をつけた。そして、そこから延びるひもの持ち手を白猫の首にかけ、逆散歩を実施中なのである。

『おしっこして！』

白猫様の命令に従い立ち小便をしようとしたセイヨーク。

『猫は立たないよ！』

これも、ことを丸くおさめるためと思い、チャックを開けあれを出し片足を上げてシャーとした。

「ちょっと、話を聞きたいんだが？」

顔を上げるセイヨーク。そこには警察官がいた。

「にゃ……」

こつてり絞られたセイヨーク。そこで、やっと猫についても詳しく知ることが出来たのだった。

つづく

第四日目　べた惚れ香水

「ついに完成したぞ。このべた惚れ香水さえあれば、全ての女は俺のものに！」

早速、大量に自身に吹き掛け部屋を出たセイヨーク。

・

「待ってー」

と器量良しの美人。

しかし、全力で逃げるセイヨーク。

それもそのはず、彼の後ろには数百人にはなる老若醜美の女達が押しかけて来たのだ。

「玉石混交しすぎだー！ー！！」

・

部屋に戻ったセイヨーク。風呂に入り、着替えた。次は量を少なくして出かけた。

またも、セイヨークは、追われていた。

「ワオーン（好きーん）」

とメス犬達。

「にゃーん（待ってーん）」
とメス猫達。

ひたすらセイヨークは走った。

「なんで、動物なんだー！ー！！」

セイヨークは、走り続けた。

つづく

第五日目 冬眠

冬。冬と言えば冬眠。ということでセイヨーク（宇宙人）もその準備に追われていた。

「あ、あった」

「こっちにもある」

「ここにも、発見」

・
・
・

セイヨークは、たくさん外で集めて来た物をベッドに敷き詰めた。

「あとは、被って寝るだけだな」

そんな時、宇宙船（外観は一軒家）のドアをノックする音が。

「はい、何でしょうか？」

「罪名はわかっているな？ 下着泥棒の容疑で逮捕だ」

セイヨークの惑星では、女性用下着に体を隠し冬眠する習慣があったのだ。

「ち、違います！ 冬眠です！！」

聞く耳をもってもらえず連れ去られるセイヨークなのであった。

つづく

第六日目 冬眠2

ここは、デパートの女性用下着売場。そこに、セイヨーク（宇宙人）の姿があった。

「下着を大量購入！」

女性店員からいたい人を見る目で見られながらもご満悦なセイヨーク。

「これなら、捕まらないぞ。よし帰るか」

・
・
・

ここは、宇宙船（外観は一軒家）内。

「ルンルン♪ルンルン♪」

鼻歌混じりに女性用下着をベッドに並べるセイヨーク。

すると、またしてもノックの音が。

「はい、なんですか？また、警察官さんですか。今度は下着買いましたよ！」

警察官は――

「いや、まだ刑期すんでないから。後、脱獄も上乘せね」
またしても、冬眠をはまれたセイヨークは――

「と、冬眠は大切なんです！」

第七日目 お札（さつ）

ここは、T〇U〇A〇Aのレジ近く、そこにセイヨークの姿があった。

（今回の作戦はお札^{さつ}に変身し、流れ流れて、お金持ちの財布にたどり着いたら有り金をいただこうというものだ。完璧に違いない！）

早速、五千円札に変身したセイヨーク。

「お会計は千五十円になります……」

店員さんがレジってるすきに空いたお札置場に忍び込んだ。

『後は、流れにまかせ——』

「おい！！死にたくなかったら手を挙げろ！！俺は強盗だ！！」
強盗の手には拳銃が握られている。

『！！！！！』

「はいー……どうぞ」
レジを明け渡した店員。

強盗はありったけのレジの金（セイヨークを含む）を自身のリュックに詰め込んだ。

・

ここは、山の中。必死に逃げる強盗。

「これは、逃げきれねー……こうなったら……」

そういうと強盗は、おもむろに地面を手で掘り始めた。

「ここに隠しとけば……牢屋を出た後に……」

強盗は、お金が詰まったりリュックを埋めて隠すと走り去った。

「よっと！」

セイヨークは、強盗がいなくなったのを確認すると煙となって地中から姿を現した。

地面からリュックを取り出すセイヨーク。

そして、リュックの中を見て喜びをあらわにする。

「予想外だったけど。結果は、万々歳だ」

不意に肩を叩かれるセイヨーク。

「ちょ、ちょっと今は取り込んで……」

それでも肩を叩かれたセイヨークは――

「なんだよ!!」

振り向いた。そこには――

「また、お前か! 下着ドロ! また、逃げたな!」

それは、冬眠を幾度も阻止した警察官だった。

「リュック持ってたし、逮捕な！俺の名前は滝沢だ。お前とは長い付き合いになりそうだから覚えとけ！」

三度、同じ警官にしょっぱかれるセイヨークなのであった。
「こんなはずじゃなかったのに……」

～
つづく
～

第八日目 りんごジュース

ここは、自販機の取り出し口内、りんごジュースに変身しているセイヨーク（宇宙人）。待ちに待った者がやって来た。

「喉渴いたからジュース買おうよ」
と美少女を絵に書いたような女の子。

「俺はいいや！」
こっちは、お邪魔虫の男。

「よし、りんごジュースに決定！」

（よし！ ラッキー！）

かわいい女の子は、お金を自販機に入れ、りんごジュースのボタンを押した。

（ここかー！ よし止めた！）

セイヨーク（りんごジュース）は、女の子が買って落ちてくる新たなりんごジュースを出ないようにせき止めたのだ。

セイヨーク（りんごジュース）を取り出した女の子はプルを開けた。

「いただきます！」
と女の子。

（これで女の子の中を堪能し、それから煙となって脱出だ！）

「待って！もう、一個あったぞ！」

とお邪魔虫（男）。

「はへ？」

「こっちのが新しいやつみたい。こっちにしなよ」

男の子は、セイヨーク（りんごジュース）と本物のりんごジュースを取り返えらした。

「え、もったいないよ！」

（えらい！女の子頑張って！）

「あ、じゃあこいつにやろうよ」

そういうと、男の子は、近くにいた野良犬の口にセイヨーク（りんごジュース）を流し始めた。

「かわいいわんちゃんね！」

がぶがぶ飲む野良犬。

（覚えてろよー！）

最後は犬に飲まれたセイヨーク（りんごジュース）なのでした。

{つづく}

第九日目 滝沢さん（警官）

「見つけたぞ滝沢さん（警官さん）めー」

ここは、セイヨーク（宇宙人・今は美男子に変身中）が自宅（宇宙船）を置いている場所から最も近い交番。

「ぐふふ……」

セイヨーク（美男子・宇宙人）の手には裸身のダッチワイフが握られていた。

「あの人、顔は良いのに……あの人形……いやー」

通行人のおばさんの批判など、なんのその。駐在所の裏にまわるセイヨーク。

「見つけたぞ！」

セイヨーク（美男子・宇宙人）の目には一台の自転車が映っていた。

・
・
・

「すっきりしたー♪」

仕返しを終えたセイヨーク（美男子・宇宙人）は、スキップしながら自宅へと向かっていた。

「貴様だな！？待てー！ー！ー！ー！ー！ー！」

後ろを見ると、ダッチワイフを後部に乗せた（特殊なアイテムで縛り付けられた）、滝沢さんが猛スピードで追い掛けて来るではないか。

「見て！あの駐在さん！！」

「まあ！嫌だわ、独り身だからって！」

おばさん達の会話に顔を赤らめながらも鬼の形相は変わらない滝沢警官。

「きさまー！これを外さんかー！！」

（待っても外しても捕まるんじゃ、逃げるしかないじゃん）

セイヨーク（宇宙人・美男子）は全速力で逃げた。

・
・
・

「滝沢さん早過ぎ……」　ここは、駐在所内。

結局捕まり、ダッチワイフを外すセイヨーク（美男子・宇宙人）をしげしげと眺める滝沢警官。

（今日は、美男子になってる。ばれることはな——）

「お前宇宙人だろ！？」

（！！！！）

「警察は宇宙人の存在を確認している!」

(!!!!)

「そして、ひそかにきさま……セイヨークの遺伝子も採取しているんだ!」

(!!!!)

全てばれていることを知り、がつくりするセイヨーク。

「ただ、お前を拘束する手段がないのだ!」

今度は、笑顔になるセイヨーク（美男子・宇宙人）。

「宇宙人がここ数年、地球に幾人も降り立った証拠は掴んでいる。つまり、きさま以外にもいるということだ!」

(!!!)

「別にお前を捕まえても逃げられるし、たいしたこともしないから……」

(逃がしてくれるのかな!?)

「俺の説教を一時間聞かせてやる!」

(!!!)

「NO———!!」

セイヨーク（宇宙人）は初めて耳にたこが出来たとゆう。

$\{\sim\cup\}$

第十日目 サリア前編

煙となって空を漂う、セイヨーク（宇宙人）。今回の目的の建物が見えて来た。五階建てのビル、その最上階。

空気孔の穴から、中に侵入し、中央に美男子の姿で降り立った。

「これが宇宙ダイヤ!!!」

宇宙ダイヤは、地球に飛来した隕石に含まれていたものだ。

「いただき!」

手を伸ばすセイヨーク。宇宙ダイヤに手が触れた瞬間警報がなった。

「!!!」

「それはあたしが貰うよ!」

声がしたかと思うと宇宙ダイヤは浮かび、そして飛んだ。

「綺麗な宝石!」

空を漂う黒い魔女を思わす出で立ち、その人物がダイヤを握っていた。

「お前が、滝沢さんが言ってた、別の宇宙人か?」

暗闇で漂う人影は――

「さあ? どうかしらね。……あとは任せたはよ」

一瞬で姿を消す黒いローブの人物。

階下が騒がしくなってきた。

「セイヨーク。またきさまカー！？」

遅しい肉体の持ち主、滝沢警官の気配がぶんぶんするセイヨークはあせる。

・
・
・

ここは、夜空。

「やったー！宇宙王の遺産。その一つが手に入れられるなんて！」
黒いローブの人物は滑空していた。

「宇宙王の遺産ってなんだ？」

真横から、聞こえた声に振り向く黒ローブ。

「な！どうやってここがわかったの？」

そこには、背中から、羽を生やしたセイヨーク（美男子・宇宙人）がいた。

「うん？そのダイヤに触ったときに俺の一部を素粒子レベルでくっつけといた。んで発信機変わりの素粒子を追って来ただけ」

平然と答えるセイヨーク。

「あなた、相当な力を持った宇宙人みたいね」

ぎゅっと宇宙ダイヤを両手で抱きしめる黒いローブの人。

「わたしは、サリア。このダイヤは渡せない！勝負よ！」
フードをとるサリア。その下は、右頬にピンクの四つ葉の入れ墨がある、金髪ショートヘアーの美少女だった。

{後編へつづく}

第十日目 サリア後編

夜空を彩る星ぼし。そのまばゆい光に混じって別の光が輝いていた。

ぶつかり合う二本の剣。

「お前強いな！」

一本はセイヨーク（美男子・宇宙人）の右腕そのものが剣になっていた。

そして、もう一本は、美少女サリア（宇宙人？）の左手の動きに合わせて空中を舞い踊る剣。

「あなたこそ！」

・
・
・

実力は互角、先に痺れを切らしたのは、サリアだった。

「十剣乱舞！！！」

美人のサリアがそう声を上げると空中に十本の剣が顕れた。

「悪く思わないでね……」

サリアが両手を天高く掲げた。

「あっ！！！」

と、セイヨークが声を出す。

「ちょっと、せっかく決め技を……」

サリアも自身の失態に気付いた。

「やば、落とした……」

二人はほぼ同時に急降下を始めた。

「あっ！地面に落ちてる！」

さらに急降下。

「たしかに！でもちょっと地面に埋まってる」
さらにさらに急降下。

二人は利き腕を伸ばせるだけ伸ばして――

「やっと取り返したぞ！セイヨークともう一人！」

なんと滝沢警官が手にしてしまったではないか。

「あたしはサリア！それあたしの……」

ふるふる震える滝沢さん。

「怪盗ごつことはけしからん。二人ともお説教二時間！！」

「「えー！ー！」」

今度は正座でお説教だったため、二人共足をつったそうなの。

{つづく}

第十一目 屋台

「へい、らっしゃい」

ここは、屋台。

そこに、セイヨーク（宇宙人・今は美男子）が立ち寄った。
「今日は、何にしましょう？」

「あつかん熱爛とおでんをたのむ」

それを聞くと屋台のおっちゃんは悲しそうな顔で――

「すいやせん。オデンのネタはほとんど残ってなくて……」

「ああ……じゃあ、残ってるネタ全部ね」

「へい。熱爛と……ハンペン二十個お待ち！」

「ハンペンどんだけー！」

驚くセイヨーク。

「すいやせん。それしかなくて……」

「いやいや、数多くね？ 悪意あるよね？ ね？」

「最近、寒くなりましたねー」

（えー！ 流されちゃったよ！）

「最近、揉め事が多くてさ、困るんだよね」と、ほろ酔いのセイヨーク。

「女のことだろ！それなら、恋愛マスターのおっちゃんに任せな。女の子は責められるのに弱いんだよ」

と自信ありげな屋台の店長。

「自信満々だねー。付き合ったこといっぱいあるの？」

「いや、一度も無いよ」

（って、うおおおーい！！話しかみあわねー！！）

・

「さっきの女のことなんだけどさ——」

酔いがまわってきたセイヨークは続ける。

「サリアってやつが我が儘でさ——」

ドス！

尻穴に強烈な痛みが。

「ギョエー！！」

涙目で振り向くと美しいサリアがいて——

「生意気な犬には固い尻尾をつけてあげるわ！」

セイヨークのけつに突き刺さった木刀をさらに蹴り入れた。

「グエー————！！！！」

セイヨークは、その後お尻を六針縫ったという。

$$\{\sim \cup \cup\}$$

第十二目 トンカツ星人

「今日のトップニュースは、カツ井星人あらわるです。カツ井星人という名は仮の名前であり見た目が豚、体が人間。それが、カツ井を作って人間に振る舞うところから……」

ラジオの音に耳をやりながら警察署の取調室でカツ井星人と会話を交わす滝沢警官。

「地球に来た理由はなんだ？」

「£%#&。*§☆★」

「どこの星から来たんだ？」

「★☆☆§、*&#%£」

「らちがあかん！」

・ ・ ・

セイヨークは、呼び出しをくらっていた。

「地球に来た理由はなに？」

滝沢さんの指示に従い、道具を使って言葉を理解した。

「£%#&*@§☆」

「わたしは、豚星とんせいから来たトンカツ星人だ。カツ丼を食の王にするために各星をまわっている。地球に來たのもそのためだ……と言ってますよ」

トンカツ星人は、一般人にカツ丼（自分のクローン豚で）を何百万杯もご馳走した。それにあきたらず、何億杯も、おごろうとしたため、食事、食品関係の会社が損害を被っていた。

「帰るように説得してくれ！」

「☆§@*%£！」

とセイヨーク。

「≡≡≡◎#&◆！」

と、トンカツ星人。

「どうやら、豚星を追い出されたくて、帰る所も、行くあてもないと言ってますよ」

「なんで追い出されたんだ？理由が分かればなんとかなるかもしれない」

滝沢警官の気になる所を尋ねるセイヨーク。その結果は――

「あまりにカツ丼をすすめるので惑星を追い出されたいですよ。なんでも、トンカツ星人の祖先にあたる豚を食べ、料理しまくって百万匹いた豚を絶滅寸前に追い込んでしまったのも理由の一つらしいですよ。」

「いや、後者が主な理由じゃないか!!」

・
・
・

結局トンカツ星人は、警察で面倒を見ることになった。

「取り調べの時のドンブリは任せたぞ！」
と滝沢警官がトンカツ星人に一言。

{
つづく
}

第十三日目 夜ばい

「約束の物は持ってきた？」

「うん、この中にある」

そういうと、セイヨークは、新聞で包まれた品を出し、中身の魚を取り出した。

ニヤつく白猫。今度は白猫が――

「これが、そうだ。受け取ってくれ」

それは、フリフリが着いたパンティーだった。

「おお、ありがとう！……良い臭いだー。窓のことは、本当なんだね？」

ニオイを嗅ぎながら質問をするセイヨーク。

「もちろんさ」

・
今は、深夜2時。闇夜に紛れて、滑空する、セイヨーク。

「あつた。この窓だ」

閑静な住宅街の一宅に降り立つセイヨーク。その二階の窓を開けるセイヨークの姿があつた。

「開いてる。ここに、麗しの美少女が！」

今回セイヨークは、子孫繁栄のため、夜ばいを敢行しようとしていた。

「グフフ、美少女がベッドに……チャンス！」

ベッドに忍び足で近ずいたセイヨークは――

「いただきまーす！」

飛び掛かり行為を開始――

「……うん？じいさんかい？まだまだ現役じゃのー」
とお年寄りの声がするではないか。

「うがっ！おばあさん！？」

予想外の登場人物に逃げ出すセイヨーク。

「四十年ぶりなんだから……逃がさないよ」

そう老婆は言う。と黒く長いムチを取り出した。

「元女王さまの、技の神髄を見せてあげる！」

元女王さま（今は老婆）の巧みな動きをするムチがセイヨークの右足に巻き付いた。その拍子に倒れるセイヨーク。

「ひえー！！」

びびるセイヨーク。

「早くこっちにくるんだよー！！」

セイヨークは、老婆とは思えない強力な力で引き寄せられられていく。

「いやだー！！！！！！！！！！」

・
・
「グワアーーーーー!!」

いろいろあったが、なんとかセイヨークは必死に逃げ出した。
セイヨークの口からは、入れ歯が頭を出していた。

・
「○リデント、くさっ!!」

次の日。セイヨークが侵入したお宅。

「部屋が荒れてたよ、おばあちゃん! あたしが合宿に行ってる時、
また勝手に部屋使ったでしょ!!」

「すまなんだ。じいさんがわしを求めて来てな……。それよりも、
わしのフリフリが付いたパンティーを知らんかね?」

~つづく~

第十四日目 マツタケEX

ここは、地球から遥か離れたキノコ星。そこに、セイヨークの姿があった。

ここに来た理由というのも――

・
・
(―先日―)

「セイヨーク、ちょっとキノコ取りに行くわよ。マツタケEXっていうキノコよ。これを一年に一回は食べないとあたし、歳をとっちゃうの」

最近、はまっている粘土細工に集中しているセイヨークは上の空で――

「いつてらっしゃい……」

その瞬間、美少女サリアの右手がセイヨークが一週間かけて製作したペガサスを粉碎した。

「あなたも、こうなりたいの？」

セイヨークの両手は無意識に、粘土で『NOです』と文字を造り、意志を示した。

・
・
(―現在―)

「っていうか、危ないかもしれないのに、なんで滝沢さん(警官)まで来たの？」

とサリア。

滝沢さんは――

「これからは、宇宙人犯罪やらが頻発することを予想して、宇宙人について詳しくなる必要があると思ってな」

――と言いながらも写真撮影に熱心に励んでいた。

「はい、はい。観光目的ね。で、こいつは？」

サリアが指差した先には、顔は豚、体は人のトンカツ星人が木の臭いを嗅いでいた。

「ああ、トン（トンカツ星人）か？ トンは、慰安に連れてきたんだ」と滝沢さん。

トンは警察官寮の食堂で料理人をしていたのだ。

「じゃあ村にマツタケEXをもらいにいくわよ」

・
・
・

「けっこう、美味しいなマツタケEX！」
とセイヨーク。

ここは、村の料理店。四人でキノコ料理に舌鼓をうっていた。

「さて、目的も済んだし帰るか。なあサリア――」
セイヨークがそう言いながらサリアを見ると体から幾本ものキノコが生えているではないか。

「きゃー！ 何よこれ！？ 滝沢さんも！！」
滝沢警官の体にもキノコが生えていた。

「なんで、あたしたちだけ!？」
困惑するサリア。

自信満々にセイヨークが――

「日頃の行いが良いとやっぱり――」
などと言っているとセイヨークの頭からなにやら生え始めた。

「イヤー！最低!!」

叫ぶサリア。

それもそのはず、日頃の行いが祟ったのかセイヨークの頭のとっぺんには巨大な○ンポが生えているではないか。

「なんでだー！ー！ー!!!!」

今度はセイヨークが叫ぶばんだった。

「なんともないのはトンだけみたいね!？」

三人の視線がトンに集中する。するとどうしたことでしょう。トンの鼻に異変が。

「○ンポか？」

とセイヨーク。早く仲間がほしい。

「「キノコか?」」

とサリアと滝沢さん。

ついに、トンもよきによきと鼻が延び始め1メートルに達した。

「「「なんで鼻なんだー！ー！ー!!!!」」」

三人は叫んだ。

ここは、キノコ星にある『深奥の森』。その道なき道を行く四人。
「こっちであってんのか？サリア」

頭の上の○ンポを揺らしながら質問するセイヨーク。

というのも、店の手違いでマツタケEY（マツタケEXが正解）料理を出してしまったためのアクシデント（体から色々生えた）だったのだ。そして、キノコのことならなんでも書いてある石碑が森にあるということで石碑を探しに森に来たのだ。

「ええ、そのはずよ。あった！石碑よ！えーと……あったあった！『伝説のキノコ。これを食したものは、キノコによる問題（体の内外の異変）をすべて解決するだろう。伝説のキノコ、その見た目は男性器で、スケベな男の頭の上に生え……』」

石碑の文を読んでいる途中から三人（セイヨークを除く）の視線がセイヨークの頭上に集まった。

「いやよ！！絶対！」
ひぜるサリア。

「男でもアレを食べるのは……」
と滝沢警官。

間接的（？）に、嫌がられた気分になったセイヨークは気分が沈んだ。

結局、嫌々食べた四人は――

「やったー！治ったわ！あ、滝沢さんも！」

「俺も失くなったぞ、頭の○ンポ！」
と頭をさでながら喜ぶセイヨーク。

「良かったじゃない！」

そういうながら、セイヨークを見たサリア。

そこには、人間サイズの○ンポに手足が生えた生物がいた。

「ギヤ——！！」

サリアの悲鳴は5分も続いたという。

つづく

第十五日目 同棲

昼間にサリア（ショートヘアの美少女）が訪ねて来て――

「あたしの宇宙船、壊れたからここに住むわ」

そう言うってから一室を彼女に奪われた。

・

今は真夜中、セイヨークは煙になり、サリアに奪われた部屋の鍵穴から中に侵入した。

「ミツシヨンその1成功であります！」

布団を乱してベッドで眠るサリア。服が上擦ってへそが見えている。

「さてと、家賃は体で払ってもらいますよー」

今にも、いただこうとした時、サリアの口から言葉が漏れた。

「グウ……鼻糞って……美味しいよね」

「えー！食ってんの！？」

・
気を取り直したセイヨークは次こそはと――

「食べまー」

また、サリアが――

「セイヨークってさーいつもはあんなんだけど、実は……ぐー」

「めっちゃ気になるー」

勢いを殺されたセイヨーク。それでもめげずにー

「ゴチになりまー」

更にサリアの寝言がー

「あーんやりたいーえー」

笑いを顔に映したセイヨークはー

「まさか、誘ってんのかな」

「ーアロビニクス」

「起きてるだろー!」

その後、一晩中サリアとの寝言問答は続いたという。

〜つづく〜

第十六日目 ストーカー

ここは、セイヨークのマイホーム（宇宙船）。

ノックの音が。

「はい、どうぞー」
とセイヨーク。

ドアが開いた先にはそこそこの容姿をした金髪の女の人が立っていた。

「こんにちは！隣に引っこして来ましたセクシです、ってセイヨークさん！偶然ね、いや運命ね！赤い糸をか…ボタン」

勢いよく、戸を閉じるセイヨーク。

また、ノックの音が。

またまた、ノックの音が。

またまたまた、ノックの音が。

シーン。

気になって逆にドアを開けるセイヨーク。

「あっ！！」

お化粧直し真っ最中のセクシが驚く。

ボタン

逆に閉められるセイヨーク。

ノックの音が。

また、ノックの音が。

頭にきたセイヨークは――

「セクシ！しつこ……」

「すみません！しつこくて。これ、メール便です」
配達のお兄さんとの間で気まずい空気がながれながらも郵便物を
受け取る。

「まったく、セクシのせいで、中身は……」

大きめの封筒から、二枚の紙と一つの指輪転がり出た。

「なになに……『はんこを押す以外は済ましてあります。もう、一枚の紙にはんこを押し、その指輪をつけ一緒に宇宙役場に提出しに行きましょう！』……もう一枚の紙？」

もう一枚の紙。その一行目には『結婚届け』と書かれていた。

「どんだけー！！」

・
・
・

ここは、スーパーマーケット。

買い物カゴ片手に商品を物色する。

「今日は、秋刀魚が安いのかー」

そんな、彼の前方に一日中セイヨークの後をついて来ていたセクシの姿が目に入った。

近づく距離、狭まる間隔。

あからさまに横によるセイヨーク。

「きゃー!!」

距離をとったにもかかわらず、体当たりしてきたセクシ。

「ごめんなさつ……セイヨークさん! あ! やだ、あたしったら!」

セクシの視線の先を見ると、とてもスケベな下着が上下セットで二つ落ちていた。

(この店、衣料品置いてないんですけどー!)

ここは、帰って来てセイヨークの自宅(宇宙船)。ノックの音が。

「……はい、どうぞ」

「宅急便です。サインお願いします。……ありがとうございました。」

部屋に持ち帰ったセイヨーク。

「『生もの注意』?」

一応開けるセイヨーク。

「よろお、ボタン」

再び閉めるセイヨーク。

携帯電話を持ったセイヨークは――

す

• • •

「……ありがとうございました。」

宅急便で送り返されるセクシ＋リボン＋段ボールなのでした。

$\left. \begin{array}{c} \text{つ} \\ \text{づ} \\ \text{く} \end{array} \right\}$

第十七日目 占い師

セイヨークは自宅（宇宙船）の居間で、テレビを見ていた。

・
・
（―テレビ内―）

「今日、お迎えのゲストはちまたで話題の……この方です！どうぞ！」

とスーツの司会者が発言するとドアから小太りの男が現れた。そして、弧状テーブルの四つつある椅子、その端の一つに座った。

「それでは改めまして、紹介致します。ちまたで話題沸騰中の天才占い師！丸尻先生まるじりです！先生は特異な占い方法をなさると伺ったのですが早速占ってもらっても、かまいませんか？」

司会者の質問に丸尻先生が答える。

「いいでしょう。では誰か？」

「あ、じゃあ私お願いします」

そう言ったのは、司会者の横に座る美人女子アナ。

小太りの丸尻先生はカメラに尻を向け地べたへ座った。そして、おもむろにブリーフごとズボンを脱ぎ始めたではないか。

「きゃー！ー！」

悲鳴をあげる女子アナ。

「大丈夫です。前の方はばりをはっていますので、遠慮なさらずに

……」

仕方なく、丸尻の肛門様と向き合う美人アナ。

「では、いきます！……オナラ様、オナラ様、どうか天言をお与えください……」

固唾を飲んで見守る出演者と撮影スタッフ。

すると、丸い尻からオナラと共に――

『ぷぷー！あなたは、二年後に有名政治家と結婚するでぶぷー！』

「「「！！！！」」」

何と丸尻先生のお尻から放屁と共に言葉がもれでたではないか。

女子アナは――

「くさっ！！でも結婚かー！」

と喜びを表していた。

そんな時、占い師が座る席の正面に座っていた評論家が――

「インチキだ！じゃあ、俺の明日の出来事を占ってみろよ！？」

評論家の挑発に丸尻先生は――

「ああ、いい、じゃろう！顔を持ってこい！！！」

顔を構える評論家は――

「恥をかいてもしらないからな！」

「では、いくぞ！……オナラ様、オナラ様、どうか天言をお与えください……」

丸い尻から――

『ぷぷー！ぶりぶりぶびゅー！！』

なんと、丸尻先生の肛門様から○ンチが勢いよく発射されたではないか。

「ギャーーーーー！！目に入ったー！！」

立ち上がり、両手で顔を覆う評論家。

「オナラ様のウン罰（天罰）じゃ！いや、たたき付け（祟りがついた）じゃ！」

「御利益を得たい女の方はオナラ様のお尻をもむのじゃー」
オンリー

評論家をやった丸尻先生は意気揚々と言葉を発する。

そんな時――

「変態じじいめ。屁へギラ言ゴシってか？」

そう言いながら姿を現したセイヨーク。じわじわ丸尻先生に詰め寄るセイヨーク。

「おまえは変態セイヨーク！」

現場の偉いてさんがカメラさんに――

「ちよっと！素人さん出ちゃ駄目！……！！……カメラさんちよっと……」

ムツとするセイヨーク。

「オナラ星人！お前だけには、言われたくない！」

「まあ、そうじゃが。今日の用件はなんじゃ！？」

（あっさり認めちゃったよ！この人！！）

「今日は、注意しに来たんだ。宇宙人が嘘について目立つのは、よ

くない！」

「むむー、わしの邪魔をするつもりじゃな？カメラも停まったことだし、遠慮はせん！！屁鉄砲^{へてつぱう}！！」
迫り来る屁による空気砲。

・

（5分後）

「はあはあ……もう出ん！玉切れじゃ！……これ以上は実が出る！」
ぐったりした様子の丸尻先生。

「もう、いんちきを止めるんだなオナラ星人」

「いいじやろう。もう、少し儲けたらな！」

テレビ撮影の監督さんが――

「はい！カット！これは、視聴率が上がるな！」

「！！！」

驚くオナラ星人（見た目は小太りのおじさん）。

「ま、まさか……放送……」

「すいませんね。生放送ですし……視聴率のためです」

結局、今後衰退の一途をたどってしまったオナラ成人なのです。

{つづく}

第十八日目 ウミーン 前編

「セイヨーク！セイヨーク！大変なことになったぞ！」

滝沢さん（警官）は、セイヨーク宅をノックしていた。

「宇宙人による仕業だ！軟球サイズの膿によるぶくれが社会問題になっているんだ！切開したらウミーンと名乗る宇宙人が生息していた！お前の力が必要だ！」

滝沢さんは、軟球サイズの膿を二つも付けた右手でノックを繰り返す。

「頼む——」

開かれたドア。さっそうと現れたセイヨークは一言。

「見てくださいよ、滝沢さん！俺の息子（下半身のアレ）！成長期みたいすよ！」

セイヨークの下半身はズボンの股間部分を大きく膨らませ、はちきれんばかりになっていた。

「でも、なんか痛くて、でかいイボイボが付いたみたくなってますけどね。用事ってなんですか？」

（それだ——！！どこに、ウミーン集中してんだ——！！）

「今なら、どんなマグロもヒイヒイ言わせられますよ!」

（膿んでる○ンポなんか全員拒否るわー！！！）

「マグロは、マグロでも、もちろん人のほうですよ」

「下ネタは、いいから!何かウミーンを追い出す方法はないのか?」
滝沢さんの質問に一考したセイヨークは――

「そういえば、サリアの知り合いに物知り博士がいるとか言っていましたよ?」

「よし!それだ。いくぞセイヨーク!」

・
・
・

所変わってサリアの部屋内。

「やば、パンツが勝負下着しかない!　まあいいか」

ノックの音が。

「ハイイ!あつ、タツキーとセイヨークか。最近あたし、すごいんだから!バストがIカップよ!Iカップ!!」

たゆんたゆん揺れるサリアの巨乳。

「でもなんかデコボコしてんのよね?」

（（なんで胸に集中ー！！！！！））

・
・
・

「……ということなんだ。物知り博士というのはどこにいるんだ？」
と滝沢警官が話の概要を説明して、重要人物の場所を質問した。

・
・
・

「ここが博士ん家」

海の上にぽつんとある小さな島。そこに一軒だけある平家建ての家をサリアは指差していた。

{後編へつづく}

第十八日目 ウミーン後編

物知り博士宅のドアをノックする。

シーン。

「ナイスミドルな博士ー!」

開くドア。

「呼んだかい? この博士ことハセカを」

そこには、白衣に眼鏡をかけた長身の男が立っていた。

・

ここは、ハセカの書斎。

「概要は分かった対処作もある」

「じゃあ、治せるんだな!」

喜ぶ滝沢警官。他の二人はあんまり喜んでいない。

「ただし、条件がある!……」

固唾をのむ三人。緊張が走る。

・

「サリアの……パンツが見たい!」
ずっこける三人。

「アイタタタ、……しょうがないわね。一瞬だけよ!」

サリアの手によりミニスカートが持ち上がる。

「「「ぶほっ!!」」」

男三人は鼻から血しぶきをあげた。

「あんたたち、どんだけ耐性ないのよ？」

（（グッジョブ！シースルー！））

・
・
・

ハセカは一枚のレポートを取り出した。

「治療薬（撃退薬）の材料が年中常夏の星。ハワイ星にある。それを採って来て欲しい。詳しいせ……」

・
・

「『……つ明は以下に記してある』か。あっ！あの島じゃない」

ここ、常夏の星。唯一の島。

「島っていうか……」

その丸い島は直径七メートル。

「小さいなー」

上陸した三人。

「この島にある木から採れる『しびしびの実』……」 サリアは、ハセカから渡されたレポートを見ながら歩いた。何かにぶつかり見上げる――

「ギャーーーーー!!」

叫ぶサリアの真ん前には、巨大な皮に包まれた○ンポが。

サリアはテンパって蹴りをアレにいれる。

「止めるサリア！萎れていつてるから！」

セイヨークの言葉に蹴り止め、見上げる。

「ちゅっ」

巨大なアレの萎れた先と口が重なった。

「グアアアーーーーー!!!!」

・
・
気を失ったサリアをよそにハセカのレポートに目を通す男二人。

「木っていつでも、この島にあるのはでっかい○ンポだけだしなー」

「たぶん、ここに書いてある『しびしびの木に魅力の養分が満たされし時しびしびの実が実る』ということからこの一本の○ンポが勃起したら実が採れるんじゃないのか」

と滝沢警官。

・
・
「じゃあ、サリア起こすしかないな!」

目を覚まし（覚まされ）たサリアは、しびしびの木（巨大な○ンポ）をあまり直視せずに奮闘する。

「アーン! ウフーン! イイ!」

サリアのお色け声作戦に全く反応しない、しびしびの木（巨大な○ンポ）。

「サリアー、ファイト!」

応援する男二人。

「なんで無反応なのよ! ……それならこれでどう!」

そう言いながら男達に効果抜群だったパンチラをお見舞いした。

しびしびの木（巨大な○ンポ）はシーン。

男二人は鼻から鮮血が。滝沢警官は鼻血を垂らしながら――

「……あのパンチラで無反応……もしかして見た目に騙されていたかもしれない! あれは、メスなんじゃないのか!?!」

「じゃあ、滝沢さん。○ンポ^{さす}摩^{さす}ってやってよ」
とセイヨーク。

「馬鹿を言うな！私は警官だぞ！」

結局じゃんけんによりセイヨークに決定した。

「くそっ！とりゃー！」

パンツごとズボンを降ろしたセイヨーク。

「見ろ！セイヨーク！しびしびの木（巨大な○ンポ）の皮が……」
しびしびの木（巨大な○ンポ）が脱皮し、蛹^{ひなご}から蝶へと進化した
（例えです）。そして、白い実が吹き出した。

「採ったぞー！って、いか臭！」

・
・
・

「出来ましたよ！皆さん！」

ここは、地球のハセカ宅。ハセカは、ウミーンの治療薬（撃退薬）
を完成させた。

博士こと、ハセカの手にはスプレーが握られていた。

「皆さん。これをウミーンによって膨れた部分に吹き付けてくださ
い」

ハセカの指示に三人（二人はしびしび）はスプレーを噴射した。

「治ったぞ！」

と喜びを表現する滝沢警官。

「これって筋肉痛に良さそう！」
とサリア。

「それに、肩コリも解消しそうだな」
とセイヨーク。

申し訳なさそうなハセカ（博士）は――

「その実は、地球でも売ってみたいで……名前は○ロン○スです……」

• • •

ここは、サリアの部屋（セイヨークの宇宙船内にある）。

サリアはパジャマに着替えていた。

「あ！……勝負下着……もろに見られたー！！イヤー」

サリアの悲鳴はなかなか止まなかった。

つづく

第十九日目 蚊

ここは、美少女揃いの白聖高校^{はくせい}。

セイヨークは、蚊となって空を羽ばたいていた。

「むむ、スレンダーな美人発見しました！隊長！」

とセイヨークがもう一匹の蚊（蚊星人、サイズを変化できる見た目は蚊）に報告する。

「直ちに追跡せよ！」

ここは、女子トイレ。

「目標は、トイレに潜伏した模様！使用中トイレは二つ！入口側は私カトが向かう！奥は、セイヨーク隊員任せた！」

「はっ！」

蚊星人カトは、トイレの上から降下した。

「先程の長い黒髪の美人に類似！本格的に降下作戦を執行する！」
そんな時、黒髪の女が蚊の飛ぶ音に反応して上を見上げた。

「ぶーさいく警報！！間違いでありま、バチン！」

「この時期にも蚊がいるのね」

カトは、便器に流された。

「た、隊長！こうなったら、自分が隊長の分まで頑張ります！」

セイヨークは、ドアの下から潜入を果たした。

「び、美人です！とびっきりの！おーっとついにおっぱじめようとしています！清い水がで：でかつ！！！！。グアーー！見るんじゃないかった。美人のイメージにひびが！」

ここは、保険室。今日は、年に一回の学生の内科検診の日だったのだ。

無事にトイレより脱出を果たしたカトとセイヨークは互いに健闘を讃え合う。

「次は代わりばんこに覗くことにしよう！」

まずはカトが覗く。

「うお！美人来た！……体も綺麗！」

次はセイヨークの番。目をつぶり祈る。

（美人か美少女をお願い……）

目を開けるセイヨーク。

「……太っ！しかも垂れてる！」

続いてカト。

「ラッキー！また、美人ちゃん！」

喜びをあらわにするカト。服を脱いだ女子高生。

「黒っ！いろいろ黒！」

「今日は一日お勤めご苦労様でした！カト隊長！」

「うむ！セイヨーク君の頑張りも中々だった今後も健闘を祈る！さらばだ！」

そういうと、宇宙人カトは飛び去って行った。

「さて、帰るか！」

飛び立とうとしたセイヨーク（蚊）を瓶の器と木の蓋挟み込み捕らえた。

「ふふふ、セイヨーク！ついに、捕まえたぞ」

そこには、蓋がされた瓶を持つ滝沢警官がいた。

瓶の中で脱出しようと色々試すセイヨーク。

「悪いが、これ以上のさばらすわけには、いかんのでな！この容器には宇宙人の力を封じる働きがあるのだ」

そして、セイヨークは、瓶の中で一生を済ましたのでした。

{おしまい}

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3079i/>

宇宙人セイヨーク

2010年10月13日15時31分発行